

『上海・蘇州・湖州・杭州の旅』を読んで

市川2中第5期生・三村武教氏が2004年11月に記された『上海・蘇州・湖州・杭州の旅』と題する紀行文を読みました。同中学の初代同窓会長だった桑村益夫さんを湖州に訪ね、同氏を慰問したあと、蘇州、杭州、上海へとめぐる約20名の同窓生の5泊6日の旅の模様を、三村氏がまとめられものですが、各地の名勝地、歴史、文化、生活、食べ物などを、多くの写真を駆使して紹介され、江南地方の様子が実に分かりやすく、すばらしい紀行文に仕上げられています。

私は桑村さんと同じ商社に勤めておりましたが、桑村さんが65歳になってから、湖州で会社設立に携わり、その会社の総経理をされておられたことは、この紀行文を読むまで知りませんでした。大変申し訳のないことです。一方市川2中では、今回20名もの同窓会の方々が彼を慰問に訪問されていたわけで、市川2中という学校の雰囲気を実にうらやましく思った次第です。

三村氏の紀行文で紹介された一部の場所は私も訪ねたことがあり懐かしい記憶があります。私の息子の最初の転勤先が上海支店で、私たち夫婦は2005年ころ彼に招待されて上海、杭州を旅したことがありました。杭州では西湖の岸边にあるホテルに泊まり、隣のレストランで食した「東坡肉」が口の中ですとろけ、「叫開化鶏」（いわゆる乞食鶏のことらしい）を箸で触るとポロリと離れた鶏肉からハスの葉のにおいが仄かに香ったのを今でも思い出します。

私自身、香港に2年駐在したことがあって、19世紀から20世紀初頭の野蛮な西欧人た

ちの歴史を知り、上海では租界の「バンド」なかでもジャーディン・マセソンの旧事務所などを苦々しく眺めてきた記憶があります。

一方、三村氏の紀行文では、中国固有の文化に焦点を当てておられます。例えば湖筆博物館の話など、書道を学ぶものにとっては貴重な話だと思います。写真に写った街並みも古い中国の独特な貫禄のある風景です。建築の専門家にとっては貴重な遺産ではないかと推察します。

桑村さんの記述のなかで、「陸羽」について書かれた箇所がありました。それで思い出したのですが、香港に『陸羽茶室』という点心を食べさせる静かな落ち着いた飲茶レストランがありました。1933年創業の香港最古の茶室だそうで、それなりの貫禄が備わって、客筋もほかの飲茶店とは少し違っていました。

朝食に入ると、一人で新聞を広げる人、鳥かごを持って向かいの人と話している老人、悠久の時を楽しんでいるような大人の雰囲気を感じさせる老人もいる。きっとこの人たちは、昔の野蛮な英国人、太平洋戦争の日本兵の蛮行、文化大革命の悲惨、そしてその後の発展など、なにもかも知っている人たちなのだろうと思っていました。

以上、三村武教氏の江南地方紀行文を読んで感じたことを書きました。読んでいるうちに様々なことを思い出して話がまとまらず、とっ散らかってしまいましたがお許しください。

紀行文を書かれたのが2004年ですすでに20年あまりが経ちました。その間に中国も随分変わりました。江南地方にも当時のような自由な雰囲気が残っていればいいですね。